

II 博士論文紹介 II
村上祐紀 著『森鷗外の歴史叙述』

《論文構成》

序章

第一部 歴史を語る

第一章 歴史叙述の実験——「津下四郎左衛門」論

第二章 「立証」と「想像力」——「梶原品」論

第三章 「忠君愛国」のレッスン——「栗山大膳」論

第四章 「据物の心得」——「都甲太兵衛」論

第二部 歴史を綴る

第一章 西周の見た幕末維新——「西周伝」論

第二章 森鷗外と外崎覚——「洪江抽齋」論(一)

第三章 探墓の歴史——「洪江抽齋」論(二)

第四章 「皇族」を書く——「能久親王事蹟」論

終章

鷗外の歴史小説及び史伝をめぐる研究では、「歴史其儘と歴史離れ」(『心の花』大正四年一月)の言説を歴史小説から史伝へと移行する分岐点と捉えたうえで、その最高傑作を晩年の三部作『洪江抽齋』『伊沢蘭軒』『北条叢亭』として論じることが定説であった。また、鷗外の小倉左遷や山県有朋との関係など、鷗外自身の人生をその作品に重なる傾向も同様に指摘される。著者は本論文において、作品に歴史小説と史伝という区分を設けず、鷗外自身を重なる研究から脱却し、同時代の言説から立体的にその作品を論じることを試みる。

たとえば、第一部「歴史を語る」における「津下四郎左衛門」論では、幕末の偉人横井小楠に関して、既に民友社編『小楠遺稿』(明治二二年五月)が刊行されていたことに注目する。すなわち、政治

的な意図で語られていた横井小楠ではなく、その暗殺実行犯の人物に焦点を当てることよって、その相対化を試みたとする。同じく「都甲太兵衛」論においても、明治期「修養」運動の文脈において英雄として語られた宮本武蔵の作品のなかで、その脇役に過ぎなかった人物を新たに中心に据えて語る鷗外の方法を考察する。この両論において、著者は、同時代の歴史叙述との比較を通して、鷗外が意識的に、対象となる事件や人物の行動、言説を捉え直し、新たな情報を加え、語り直していく試みを見るのである。また、第二部「歴史を綴る」では、鷗外の歴史叙述の方法が近代史学に接近していたことを、さらに論証する。例えば、鷗外の史伝最高作とされてきた『洪江抽齋』を取りあげ、「わたくし」による池田京水の墓及び武鑑の探索が、同時代の歴史学において行われていた方法と重なることを指摘する。同時に、洪江抽齋に関する調査の過程を明らかにし、さらには抽齋歿後までも語られている点に、洪江一族の歴史を語り直すという鷗外の企図を読み取り、「わたくし」の登場が必然であったとする。

本論文は、作品を鷗外の「歴史叙述」として捉え、鷗外によって選択された、近代史学に密接な方法を検証すると同時に、鷗外の視線が同時代に広がる問題意識と連動していたことを明らかにしたものである。こうした点はいずれも、従来の論を踏まえたうえで、文学の分野にとどまらぬ鷗外の同時代性を見たものである。著者自身も述べるように、本論文において指摘された「歴史は誰かが語るものにすぎない」という鷗外の視線は、同時に、他の作品においてはいかなる方向に向かっているのかという、新たな問いを喚起するものである。鷗外の同時代に関する問題意識がいかにその作品に提示されているのか、さらなる研究が俟たれる。

(福山恵理)